

Opinion

第6回 江戸時代の大火

大災害の時代 五百旗頭真



日本列島の住民にとって、もっとも恐ろしい災害は何かだろうか。俗に「地震・雷・火事・親父」というが、今では親父はもはや怖い存在ではない。雷も威力はあるものの、多数の犠牲者を出すわけではない。むしろ「3・11」後の日本人の多くは、ここにはない津波を真っ先にあげるのではないだろうか。では津波が日本列島最悪の災害なのか。

別表に掲げた犠牲者を多く出した地震災害のリストを見れば分かるように、地震のみによる犠牲者は4位以下である。それに對し、2位、3位の2万人レベルの犠牲はいずれも津波によるものである。だが津波よりも、もっと犠牲を強いたのが火災であった。ワースト1位の関東大震災は、10万人を超える犠牲者の9割が焼死だったのである。近代史最大の被害を出した関東大震災の火災は、大地震が起こった日にたまたま、台風(低気圧)となったことによる強風が吹き荒れた不幸な偶然ゆえである。だが地震はなくとも、強風下の大火をこの列島は繰り返して経験してきた。

悲劇を礎に防火都市に

強風下でなお延焼の恐れ

正徳9年のことであり、関ヶ原の勝利の3年後に江戸に幕府を開いた。以後、幕府が大名家たちに命じ、江戸城と江戸のまちづくりにため5次にわたる天下普請が行われた。それがほぼ完成したのが、寛永年間(1624-44年)であり、この頃の江戸の人口は約30万人であった。この間に、1601年に日本橋畔河町から火が出て大屋となった。孝翁、わらわぶきの屋根に吹々と飛び火したので、幕府は屋根を板敷きに転換するよう命じた。草ぼうぼうではないにせよ板も燃えやすい。瓦ぶきが正解であろうが、当時瓦は高価であり、1649年の慶安江戸地震では、屋根の重さが家屋倒壊を招いたとして、瓦ぶきが禁止されたりした(山本純美「江戸の火事と火消」)。その日、1月18日を迎える。80日以上も雨が降らず、江戸は乾き切っていた。前日から北西の風が吹き、その日は烈風となった。午後2時、本郷の本妙寺から火が出た。北から南へ、またたく間に燃え広がり、南へ逃げる人々を飛び火した前方の火がささきり、大量の焼死者が出た。火は二方に分かれ、一方は西風に



Table with 4 columns: Year, Earthquake Name, Magnitude, Death Toll. Lists major earthquakes from 1923 to 1948.

また延焼をくい止めるラインとして、川や堀に沿った火よけ土手や小路が住民を救出させて設けられた。当時の消火は、倒す破壊消火が主であったが、これらはその効果を高めるものであった。しつこいを塗り込んだ耐火建築も推奨された。より重要な改革は社会制度であった。幕府はすでに旗本による定火消という消防隊を設けていたが、大火の2年後には4倍増し、8組1000人余体制とした。また大老火消の強化を命じ、加賀藩の火消隊などが大いに活躍した。さらに享保年間の1718年には町人たちに町火消を自発的につくらせ、2年後には13組の47町火消体制が成立した。こうして幕府体制が成立した。こうして幕府体制が成立した。こうして幕府体制が成立した。

た。が、明暦大火のような犠牲を出すことはなかった。江戸の人口は享保年間100万を超えて、世界最大の都市となった。万単位の大規模な火災は明暦9(1707)年の目黒火災と1712年の大火の2回であり、1000人の犠牲を出すことはまれとなった。江戸はそれなりに防火体制のある大火となったのである。幕府は財政難をしのぐためにも大火火消・町火消の防火の多くを委ねた。しかし、大名や町人も財政難にあえぎ、火消の人員維持は難しくなった。せつこの火よけ土手や小路も次第に商業活動などの地にお込まれた。江戸後期には消防体制の揺らぎは否めなかったが、何とか大火との格闘を屈することなく続けた。明治以降も東京に大火はやまなかった。明治25(1892)年の神田大火には近代的な蒸気ポンプ車が出動したが、まだ加圧水道が完備せず、火勢に負けてポンプ車が後退を強いられるもした。死者は25人であった。不燃建築物も水も火消手段もまだまだ中途半端であった。関東大震災を前に、東大の今村恒助教授が大震災の到来を予言したのに対し、上司の大森房吉教授は科学的根拠は何も無いとした。有名な論争である。しかし両人は一致して震災に際しては火災の危険と、近代的水道システムの未整備を指摘した。果たして、その瞬間に狂う火災旋風は大都市東京に押し寄せた。10万を超える明暦大火以来の犠牲者を出したのである。その後大きな火災は、昭和9(1934)年、強風におおられた函館大火であり、1万を超える家を焼き、2000人余が犠牲となった。戦後の混乱期を経て、60年代以降、強風による大火は76年の酒田大火を例外に激減し、80年代以降は見られなくなっている(室崎益輝「函館大火と酒田大火」)『災害対策全書』第一巻所収)